

臨床こくご学における平和教育の実践 —ジャーナリストとの協同授業—

札埜 和男

The practice of peace education in Japanese clinical trials
—A collaborative lesson with a journalist—

Kazuo FUDANO

Accepted October 3, 2016

抄録：臨床こくご学における平和教育の実践について報告し効果や課題について論じた。方法として戦場ジャーナリストの西谷文和氏と行ってきた協同授業をまとめ、生徒の感想をもとに一般的な国語科教育における平和教育との違いについて分析した。結果としてゲストの存在は生徒が想像力を巡らす際に助けとなることでリアリティを持って学ぶことができ、生徒の中には行動につながる萌芽が見られた。課題としてはゲストの話を批判的に聴くことが挙げられる。

索引語：臨床こくご学，平和教育，西谷文和，協同授業

Abstract: In this paper I report the practice of peace education in Japanese clinical trials and study the effects and problems. I collected collaborative lessons with a journalist, Fumikazu NISHITANI, and analyzed the differences in common Japanese student lesson plans. The study revealed that the guest helped the students imagine, and learn reality. Moreover, it provided the basis of behavior in students. However, there were problems regarding how the students heard the guest lecture critically.

Key Words: Japanese Clinical trials, peace education, Fumikazu NISHITANI, collaboration lesson

1. はじめに

国語の教材の内容に関わる各界のさまざまな現場にいる人をゲストとして教室に招き、高校生と一緒に考えたいテーマ（話題・争点）について語ってもらったり、そのスキルを披露して頂いたりしながら、その教材の内容をさらに深める、そういった授業内容や方法を追究する学問を筆者は「臨床こくご学」と呼んでいる。（「国語」でなく「こくご」であるのは、日常を意識してことばに生活感を込める意味からである）。招くゲストは基本的に職業を持った社会人（一市民）である。生徒は学んだことを頭の中（観念の世界）で自己完結しがちである。目的は、その傾向を打破し、学校外の大人との出会いを通じて、自己だけでなく社会への考えを深め、社会が抱える問題に主体的にかかわる思想の礎をつくることである。なぜ、学校外からゲストを招くかという、学びの内容を立体的に捉え直し「リアリティ」を持たせるためである。「臨床こくご学」という用語は近年発表した「当事者性をはぐくむ国語教育のアイデア」（おまかせ HR 研究会 2016 年『これならできる主権者教育 実践アイデア&プラン』学事出版）や、「刑事司法へ『ことば・教育』にまつわる要求」（指宿信也他編 2017 年『シリーズ刑事司法を考える第 0 巻 刑事司法への問い』岩波書店）の拙論でも積極的に用いているが、まだ国語教育学の領域では広がっていない。

今回の例に即して述べると、国語で戦争文学を扱う場合、戦争というリアリティを文学という虚構を通じて理解しなければならない難しさがある。「描かれていることこそが、戦争に際して体験される『真実』なのだと気づいたときに、『遠いところ』との距離を想像力によって埋めていく学習が始まる」（竹内，2011，p.148）のだが、想像力によって埋めるのは体験していない以上、困難が予想される。一般的な国語科教育では、戦争の持つ「人間の生死に関わる極限状況への想像力なくして、『過去の戦争』や『遠くの戦争』と今の自分たちとの『乖離』を埋めることはできない」（竹内，2011,p.149）とされている。そうすると、文章上では理解していても、リアリティを伴った理解にはなりにくい可能性がある。しかし実際に戦争を体験した人や戦場を知っている人とともに文章を読み解くことは、生徒が想像力を働かせやすくする「補助輪」となるのではなかろうか。そしてその理解は「表面的」に止まらずリアリティを持った知になるのではなかろうか。また一般に国語・文学での平和教育は「ごく普通には、いわゆる『戦争児童文学』（あるいは戦争文学）を教材とする国語・文学の授業を指す」（大槻，2005,p.302）といわれるが、臨床こくご学での平和教育はこれに止まらない。本稿では実践例を紹介しながら生徒の感想作品をもとに、臨床こくご学としての平和教育には、前述の目的に関わる効果があることや、一般的な国語科教育との違い、その可能性および課題について論じる。

2. ゲスト講師について

（1）ジャーナリスト・西谷文和氏のプロフィール

筆者の臨床こくご学における平和教育で欠かせない協同授業者が、西谷文和氏である。「お話や映像はもちろんのこと、何より衝撃を受けたのが冷静に淡々とお話する西谷さんの姿だ。無駄な時間を過ごす気はない、伝えるものを伝えるためにこの場にいるのだ、という気構えが伝わってきた。本当に、本物の戦争に触れている人なんだと実感した。西谷さんの周りの空気はずっと張りつめていた」。

これはある年の生徒の西谷氏評である。

西谷氏は1960年生まれで、京都府立向陽高校を経て立命館大学理工学部を中退。大阪市立大学経済学部に入學し直して卒業後、1985年から吹田市役所に勤務され2004年末に退職された。現在はフリーランスのジャーナリストでNPO法人「イラクの子どもを救う会」代表を務める。9・11事件後に始まった「テロとの戦い」以降、イラクとアフガンを精力的に取材し、大量に使用された劣化ウラン弾の影響と思われる被害の実態を見て、被爆国である日本から人道支援を行う必要があると感じ2003年12月「イラクの子どもを救う会」を設立した。テレビ朝日「報道ステーション」、読売放送「ニュースten」、MBSテレビ「VOICE」などメディアへの出演は多数に上る。2006年度「第12回平和・協同ジャーナリスト基金大賞」を受賞した。

(2) 西谷氏の考え

西谷氏がどんな思いを抱いて戦場に赴くのか、2011年の「現代文」受講者の質問への回答を記して紹介しておく。Qは生徒の質問であり、Aは西谷氏の回答である。時間の都合上、筆者があらかじめ示して西谷氏から頂いた回答を記しているので、質問の順序に流れがあるわけではない。

Q イラク取材前と後で戦争への思いの変化はあったか。

A 取材でムハンマド君やハッサム君などに会って、あいつどうしてるやろ？と思ったりして、よりのめりこむようになった。

Q 今の日本は平和といえるか。

A 毎年3万人が自殺する。それが7年連続。21万人死んでいる国が日本の現実。イラクで犠牲になった米兵は5千人。果たして日本は平和なのか。

Q 戦場に行く時必ず持っていく物は。

A 焼酎。現地の通訳の人と一緒に飲む。自身の通訳してくれるのは、墮落した（笑）イスラム教徒が多いので、喜んで飲んでくれる。お酒を酌み交わしながら、生い立ちや本音を聴ける。潤滑油の役割。本音までお互いにわからないといざというとき信頼し合えないし、いい仕事ができない。

Q どれくらい現地では必要な医療器具が足りていないのか。

A イラクでは、子供用手術用具・CTスキャン・癌の薬。アフガンでは、やけどや風邪、下痢の薬、毛布（毛布は1500円。輸入品。自国で生産できない）。

Q 戦争の中において、希望とはどういうものか。

A 教育を通じて「平和」を学んでいくということ。文字が読めない、教育を受けていないために簡単に「聖戦だから自爆せよ」と教えられたら、疑わずにやってしまう。

Q 誰のために、何のためにやっているのか。

A 自分のためでもあるし、社会や他人のためでもある。いろんな人に出会って逆に勇気をもらっている。伝え広げることで戦争の予防という意識もある。毛布を持っていくことで、誰かの命を救えるなど素直に思うし、同時に雪のキャンプ地を見たいなという自身の欲求もある。

Q 自衛をどう考えるか。

A こちらがピストル持てば相手はロケット弾を持つ。こちらがロケット弾を持てば相手は劣化ウラン弾を持つ。終いにはお互い核爆弾を持つようになってしまうのが今の時代。「自衛」にならない。自爆テロは米軍でも防げない。「座ってまあしゃべろうや」が一番いい¹⁾。

(3) これまでの協同授業

これまでに附属高校の国語等の授業で行った西谷氏との協同授業を表にまとめてみる。

表1 西谷氏との協同授業

	年度	科目	学年(期)・クラス数	内容・教科書
①	2007	国語表現	3年(41期)/3	インタビュー授業
②		現代文	2年(42期)/2*	憲法の条文(憲法第9条)
③		古典	2年(42期)/1*	漢文(諸子百家)
④	2008	現代文	2年(43期)/3	評論(多木浩二「消費されるスポーツ」) 東京書籍『現代文1』
⑤	2009	現代文	2年(44期)/2	小説(ティム・オブライエン・村上春樹訳「待ち伏せ」) 筑摩書房「精選国語総合現代文編改訂版」
⑥	2011	現代文	2年(45期)/3	小説(遠藤周作「その夜のコンヤック」) 大修館書店「現代文1改訂版」
⑦			1年(46期)/1	小説(原民喜「夏の花」) 東京書籍「国語総合現代文編」
⑧	2012	現代文	1年(48期)/2	小説(「待ち伏せ」) ⑤に同じ。
⑨	2013	現代文	3年(47期)/2	評論(菅谷明子「メディア・リテラシー」) 桐原書店「展開現代文」
⑩			1年(49期)/2*	評論(山極寿一「暴力はどこからきたか」) 数研出版「国語総合現代文編」
⑪	2015	課外活動	1・2年(50・51期)	(戦争や平和に関する有志生徒の勉強会)
⑫	2016	人権学習	3年(50期)/5	(題:「世界の紛争地から人権を考える」)
⑬	2017	現代文	2年(51期)/3	⑨に同じ
⑭		古典探究	2年(51期)/1	漢文(「新豊折臂翁」)

備考: クラス数とは筆者の受け持った数のことである。*は2回来て頂いた。

西谷氏との協同授業の流れは、始めに筆者が西谷氏を生徒に紹介するために、西谷氏と簡単なやりとりを行う。その後は全面的に任せる。授業の中心は西谷氏が実際に戦場へ足を運んで撮影してきた映像である。その分映像の中味は生徒が息を呑む光景であり、生徒を惹きつける。西谷氏はこれまでにイラクやアフガニスタンでの取材をもとにDVD『戦争あかん』シリーズを4本制作している。授業内容には映像鑑賞、説明、質疑応答(議論)が必ず含まれる。

本論では主に漢文での実践となる③、小説での実践となる⑧、評論での実践となる⑩の内容や生徒の感想を紹介する。

3. 協同授業の実践例

(1) 漢文での協同授業

2学期に学習した諸子百家の思想(儒家の「性善説」・法家の「性悪説」)を、西谷氏の映像を見ながら現代の混沌とした国際情勢に照らし合わせて各思想の持つ現代的意義を考え、それを通じて人間

とは何かについて考える授業を試み、生徒同士で議論させた。さらにその議論の結果をもとに西谷氏への質疑応答を通じて、人間と社会について深く考える機会とした。

2007年12月に映像を見てから「イラクに行って諸子百家のような役割を担った場合、どんな思想を広めるか。あるいはどんな政策を採るか」について班で議論させた。「人類皆兄弟」思想、博愛思想、性善説思想（どの人にも良い心があることを伝える）、「愛は地球を救う」思想、ジョン・レノンの思想（「All You Need Is Love」）、スポーツで平和を！（スポーツを通じて国民の結束を高める）といった考えが出た。政策としては、スポーツを訴えた班の「イラク人の知らない野球を広めることによって、今までにない感動を与える。WBCに出て負けられない戦いを繰り広げる」という案がユニークであった。a～gは最初の西谷氏の授業の感想である。

a 今日の授業でやったイラク戦争の話はまさに性悪説の良い例だ。観た映像は本当に衝撃的でとても心が痛んだ、というか、とても嫌な気持ちにさせられた。戦場で幼い子どもたちがあんな風に苦しんでいた時、私は何をしていたんだろう。（中略）現実をしっかりと見なければと思って、頑張って見ていたが耐え切れなくなって途中からは目を逸らしてしまった。（中略）でも私が今このように感じていることも1週間もすれば忘れてしまう気がする。またいつもの日常に戻ってイラクのことなんか思いつかない気がする。それに日本が今のイラクの状態だったら・・・と考えると戦争相手がイラクで良かったと安心する自分がある。そんなふうを考えてしまう自分が悔しい。（中略）授業中、ただの教材として読んでいた性悪説が、今はすごく胸を痛める。でも今日感じたこの気持ち、ずっと覚えていたい。何ができるのかな、何ができるのかな。助けたいという気持ちを実際に行動を起こすことはすごく勇気がいるけれど、自分にもそんな勇気があればいいなと思う。

b あのDVDを観るとやはりこの社会は性悪説かなと思います。しかし個人的には性善説でありたいとも思います。性悪説はあまりにも自分自身に厳しい考え方なので。（中略）でもイラクやアメリカの人々に今そんなことを言ったって、誰も納得しないでしょう。みんな家族や友人を殺されているのに「仁義礼智」を言っても「あっちにこうされているのに黙ってられない」と誰もが言うでしょう。しかし性悪説を備えればみんなますます開き直って戦争は激しくなると思います。したがってイラク戦争には性善説も性悪説も全く意味をなさないと思います。私の班は「スポーツ」というキーワードを出して先生にも笑われたけど、かなり良い案だと考えます。他の案「思いやり」とか「認め合う」とかは理想です。それができないから今戦争が続いているんです。論理的に考えると、確かに「思いやり」があれば争い事は起こらないし、お互いが「認めあ」えばイラクとアメリカは良い関係が築けるし、「我慢」をすればこの争いは終わるでしょう。しかし、アメリカ人が撃ったウラン弾のせいで障害を持った子は本当にアメリカに「思いやり」を持つことができるのでしょうか。家族や恋人が殺されているのに「認め」ることができるのでしょうか。「我慢」するなんて、もちろん無理です。人間の感情はそんなに簡単なものではありません。理想と現実の違いです。理論どおりには絶対いきません。その点「気持ちを他のことにそらす」ことはまだできることではないかと思います。

c 古典の授業で性善説と性悪説をしたとき、私は人間の本性は性悪説に基づいていると感じました。けれど今回の講演を聴くことで、人は人を善だと思えることが大切だと思いました。（中略）アメリカだけを敵として責めるわけにはいかないと思います。戦争は世界の問題であり、決して遠いものではないからです。イラクでも亡くなったアメリカ兵にも家族はいます。一般市民が巻き込まれることは最も残酷なことですが、命の重さに変わりはありません。

d 法治国家は性悪説に基づいているように思えるが、私はそうではないと思う。法律があるのは守る

べき最低限のルールや国を動かすために必要だからではないか。実際クラスでの話し合いで、イラクの憎しみの連鎖を断ち切るために法律で抑えるべきだと言った人はいなかった。

e ビデオを見て、性悪説を以て人に接する時は、しっかりと相手のことを見極め、本当に悪なのか、果たして自分たちは善なのか、疑問を持ちながら接しないと、このイラク戦争のようにアメリカ側のイラクに対する性悪説がすべて矛盾に聞こえ、誰も喜ばない争いを招いてしまうようになるのだと思った。

その後「西谷さんの授業から『理想郷・桃源郷・ユートピア』を考える」という課題を出した。その作品を紹介しておく。

f 理想郷は永遠の夢でしかないかと言われれば、僕は「No」と答える。理想郷にこの世界を近づける手段はあると思う。それは人間全てが「他人の幸せを絶対に奪わないように生きること」だ。「人間すべてが自分の幸せを誰にも邪魔されずに追い求められる世界」が、皆が意味する理想郷に最も近いものだと思う。(中略)最後に僕に何ができるか？それは前述のとおり「他人の幸せを奪わないように生きる」ことに尽きる。もちろん僕たちは人間なのだから、それが完璧にできるとは思わないが、少なくともそういうことを常に思って生きていこう。

g 私は西谷さんの話を聴きながら「私たちにできることは何か」を考えていた。日本にいる私たち高校生でもできることには限りがある。その中で最も大切なこと、それは「知る・理解する」ことだ。これは「誰もができる国際協力」としてよく言われることだが、やはりこうしないことには何も始まらないのではないか。(中略)今回の西谷さんの話はいろいろなことを考えさせられた。こうした機会を通じて「知り・理解する」ことも国際協力の一環である。

(2) 小説での協同授業

戦争小説を扱う場合は生徒にリアリティを持って読み取らせることをねらいとする。教材については(小説に限らず)事前に西谷氏にも読んでおいてもらう。そしてイメージが湧きにくい、あるいは理解しにくい箇所を生徒にピックアップさせておき、当日その箇所について解説してもらう。その後現在の戦争について映像を通じて発展的に説明してもらう。『待ち伏せ』は娘が9歳の時に人を殺したことがあるのか、と尋ねられたことから始まり、戦争の回想へと続く。数字は生徒が疑問にあげた箇所を示し、疑問と回答(Aの記号)を最後に記す。

彼は背の低いやせた男だった。年は二十歳前後だった。私は彼が怖かった——というか何か怖かった。そして彼がその小道を歩いて私の前を横切ったときに、私は①手榴弾を投げ、それは彼の足下で爆発し、彼を殺した。

あるいは、もっと前から話そう。

真夜中ちょっと過ぎに、我々はミケ郊外の待ち伏せ地点に向かった。(中略)それからふと目を上げると、霧の中からその若者が現れるのが見えたのだ。彼は黒服を着て、ゴムのサンダルを履いて、②灰色の弾薬帯をかけていた。彼はわずかに猫背気味に歩いていた。首は、まるで何かに耳を澄ませているかのように、横に傾いていた。彼は③くつろいでいるように見えた。彼は片手に武器を持っていた。銃口は下に向けられていた。とくに急ぐ様子もなく、彼は④道の真ん中を歩いていた。音はまったく聞こえなかった。音を聞いた記憶はまったくない。彼は何かしら朝霧の一部であるように見えた。あるいは私自身のイメージーションの一部であるみたいに。しかし私の胃の感触にははっきりとしたリアリティーがあった。私はすでに手榴弾のピンを抜いていた。私は腰を少し浮かせた。⑤私は条件

反射的にそうしたのだ。私はその若者を憎んでいたわけではなかった。私は彼のことを敵として考えたわけではなかった。私はモラルや、政治学や、あるいは軍事的責務を考慮したわけではなかった。私はしゃがんで、頭を低くしていた。胃の中からこみあげてくるものを、私はなんとか飲みこもうとした。⑥それはレモネードみたいな味がした。フルーツっぽくて、酸っぱかった。私は怖くてたまらなかった。人を殺すということについてとくに考えなかった。この手榴弾はあいつをどこかに追いやってくれるのだ。あいつを消し去ってくれるのだ。そして私は身を後ろにそらせた。頭の中がからっぽになり、それからまたいっぱいになるのが感じられた。さあ投げるんだと自分に⑦言いきかせる前に、私はもうすでに手榴弾を投げてしまっていた。(中略)⑧そしてその青年はまるで目に見えないワイヤにひっぱられるみたいに、上の方に向かって体をねじった。彼は背中から地面に落ちた。彼のゴムのサンダルは吹き飛ばされた。風はなかった。彼は小道の真ん中に横たわった。⑨彼の右脚は体の下に折り畳まれるように潜りこんでいた。彼の右目は閉じていた。左目は星の形をした大きな穴になっていた。

⑩それは生きるか死ぬかの瀬戸際ではなかった。そこには危険らしい危険はなかった。何もしなければ、若者はおそらく何事もなくそのまま通り過ぎてしまったことだろう。そしていつもそんな具合にことは運んだだろう。

あとでカイオワが私を説得しようと試みたことを覚えている。あの男はどのみち死んだだろうということを。彼らは私に言った。⑪あれは正当な殺しなんだ、あの男は兵隊だったし、これは戦争なんだ。お前はもっとしゃんとしなくちゃいけない。いつまでも死体なんか眺めてないで、自分にこう尋ねるんだ、もし立場が逆だったらこの死んだ男はどう行動しただろう、と。

そんなのはどうでもいいことだった。それらの言葉はあまりにも複雑で、あまりにも抽象的すぎるように私には思えた。私にできることはその若者の死体というひとつの事実をただぼんやりと見つめていることだけだった。

⑫今でもまだ、私はそれを整理し終えてはいない。あるときにはあれはしかたなかったんだと思う。あるときにはそうは思えない。普通に人生を送っているときには、私はそのことをあれこれ考えたりしないようにしている。でもときどき、新聞を読んでいたたり、部屋の中に一人で座っていたりするようになるときに、私はふと目を上げて、朝霧の中からその若者が現れるのを見ることがある。彼が私の方に歩いてくるのが見える。彼の背中はずかしく猫背気味である。彼の頭は片方にかしいでいる。私の前数ヤードのところを彼は歩き過ぎていく。そして何かを考えてふっとほほえむ。それから道を歩きつづけ、そのまま霧の中に消えていく。

(安藤宏他編『精選国語総合現代文編改訂版』筑摩書房 2006 年 3 月 6 日検定済 pp.98-105.)

①手榴弾についてよくわからない。どうやって相手に投げて、投げるとどうなって、実際にはどんな音がして、どれくらいの殺傷能力があるのか。ピンを抜くだけでは爆発しないのか。

A ピンを抜いて何秒かして爆発する。早く投げ過ぎると向こうからまた投げ返される可能性もあるので、ちょうどいいタイミングで投げなければならない。今はIED(即席爆発装置)携帯になっている。

②「灰色の弾薬帯」とはどんなものか。

A 弾薬はすぐになくなってしまうので弾薬帯をつけておかなければ撃てない。

③④戦場なのに、こんなリラックスすることもあるのか。

A 戦場が日常化していたから緊張感が解けていた。人間はずっと緊張することはできないから、くつろいで見えたというより普通に歩いていたのではないか。

⑤条件反射的に人を殺せるのか。憎んでもいないのに敵とも思っていないのになぜ殺せるのか。

A 人を殺す訓練をしているから。自分が殺されてしまうので、殺してもいいのだと教え込まれている。戦争だから普通殺しても捕まらないし、抵抗はない。

⑥戦場でこんな考えを持てるのか。

A いきなりなぜか思い出す。不思議なことに鮮明に覚えているものもある。割とありがちなことだ。

⑦言い聞かせる前に投げてしまうって、言い聞かせてから投げるのではないのか。「考える前に」殺そうとしない。

A 既に手に持っている。訓練の賜。言い聞かせたらやはり投げられないから自分を止めてしまう。言い聞かせたら冷静になって止めてしまうかもしれない。言い聞かせる前に止めた。

⑧これはどういう様子なのか。

A 人間が飛んだ様子。

⑨これはどういう様子なのか。「左目は星の形」こんなふうになるのか。

A 銃弾が回転するものと大きな穴が開く。回転しないものは貫通する。これは回転するものだと考えられる。

⑩そんな状態でなぜ攻撃するのか。

A やる方は死なないが、やられる方は死ぬ。しかしやられる方はやられていることに死ぬまで気づかないから、生きるか死ぬかの瀬戸際ではない。

⑪「正当な殺し」などあるのか。

A 戦争にどちらが正しいなどない。シリアもどちらも正しくない内戦が起こる前に止めなければならなかった。

⑫戦場に行った人はその後どんなふうに心の整理をつけていくのか。

A アメリカの帰還兵は酒を飲んだり、ドラッグをしたり。奥さんを殴り殺す人も。そうならない人だって、整理しきるのは難しい。

全体を読んで『待ち伏せ』は戦争っぽくない。戦争ってどんなことをするのか。銃を撃ちあうだけじゃないのか」「お互い殺意がなかったにも関わらず人を殺してしまったということなので、人を殺すことの意味がわからなくなってきた」「戦争って実際はどういう感じのものだろう」「心の準備ができていないのに殺すことがわかっていないのに、その時がやってきてしまった、ような感じがする」「殺人にも慣れが生じるのだな」といった感想があった。

それらに対して西谷氏は「戦争の無人化」について言及された。人を殺してしまったのを目の前で見たらトラウマになり、戦闘機に乗っていたら撃たれてしまうので、現在の戦争では爆弾を戦闘機に仕掛け、携帯で見えない所からゲーム感覚で爆破する方法が採られているという。

映像ではシリアの現状をもとに戦争について説明されたが、生徒からの「日本は何ができるのか」という問いかけに対しては「今の政治ではシリアの内乱まで目が行き届いていないので、目を向けることが大切だ。募金をしてもお金を届けることができない。募金は逃げてきた人に使われているが、本当は逃げられない人に使ってほしい。今はそれができない。みんなが無関心だと戦争は続いていってしまう。募金などは本質的な解決にならない。だから関心を持ってほしい」と結ばれた。

(3) 評論での協同授業

続いて評論での協同授業を紹介する。評論で扱う場合は、戦争そのものをテーマに考える場合と、メディア・アリテラシーを考える場合がある。ここでは前者で⑩の授業を採り上げる。扱った教材は山極寿一著『攻撃』と『共存』（坪内稔典他編『国語総合 現代文編』数研出版 2012 年 3 月 5 日検定済 pp.52-56）である。霊長類学者である著者自身の研究の知見を基とした、戦争に関する現代社会論である。西谷氏の撮影映像を見ながら現代社会と戦争に関する評論の内容について、氏と一緒に考えを深める機会とした。

評論の内容を要約すると次のようになる。学問の調査結果から 500 万年に及ぶ人類の進化史のなかで、戦争を是として暮らしたのはほんの最近の数万年か、数千年のことであり、その後人間に近いサルや類人猿の野外研究が進むと、動物における攻撃行動も負ではなく正の意味があることが明らかになった。サルたちにとって攻撃とは共存の手段なのである。けんかの際にメスや子供が、オス同士のけんかに割って入ることがある。オス同士の闘争が自分たちの共存に危機をもたらすことを知っていて、オス同士も仲裁によって引き分ける結果を望んでいるからである。威嚇と攻撃の象徴のように見なされてきたゴリラの胸たたき（ドラミング）も、闘わずに自分を主張する平和な行動であることがわかってきた。現代の戦争は、「仲間と共存するために必要な攻撃性」とは質が異なる。戦争に不可欠な「相手を抹殺するための攻撃性」は、相手との関係や相手の性格を変更不能なものと決めつけ、自然界には存在しない頑固で醜悪な敵を仮定したときに生まれてくる。それは、人間が進化の過程で必然的に得た能力ではない。相手を失ってしまったら、そもそも共存のために攻撃する意味が失われてしまうからだ。最近、人々の口からテロを抑止するために暴力を是認する声が聞かれるようになった。しかし、相手を抹殺することによって自分を守れるという誤った考え、そのための武器や威嚇が調停の手段になるという幻想は捨てるべきだ。われわれの祖先が社会をつくるために発達させてきた攻撃性は、弱者が強者の対立に終止符を打ち、勝敗を決せずに共存する方法を教えてくれる。弱者が自分の権益を守ろうと味方につく強い相手を選んでいては、その実現は難しい。それは戦争を肯定し、勝者をつくり出そうとする行為にほかならないからだ。抹殺せねばならない人間など、この世に存在するわけがない。人間は類人猿の社会を見習い、真摯な目で過去に通ってきた精神世界を見つめ直す時なのかもしれない。

以上の内容理解を終えた後「なぜ戦争は起こるのか、防ぐ手立てはないのか」について、考えを織り込んで感想を書かせ、それから西谷氏を招いた。西谷氏の授業は生徒の要望もあって、二度行うことになった。一度目は西谷氏の映像中心の授業だが、二度目は実行委員的な役割を持つ生徒を募り授業を創らせた。2 クラスの内 1 クラスは司会役の生徒と 4 名の生徒が代表として出て、西谷氏と対話しながらパネルディスカッション形式での授業を行った。多くの生徒の反応を採り上げたいが、ここでは紙数の関係上、誰よりも積極的に取り組みパネルディスカッションの司会を行った Z という生徒の感想を採り上げながら、彼の変容を追っていく。まず Z は評論の授業を終えて次のように書いている。

「筆者の意見として戦争をやめさせる方法はトップに立つ者の質によって変わっているということです。ゴリラ達と私達の大きな違いの一つは生活の豊かさがあると考えられます。彼らは生きるために全てを行うのに対して私達は生きていることの大前提としてすべての行動を行っているように思います。したがって僕の中では彼らの『生きる』と私達の『生きる』は大きく違っています。こう考えると筆者の主張が前回の授業のように行き詰まってしまうことは当然ではないかと考えます。僕は弱者が強者につこうとすることが戦争を引き起こす点については激しく同意はしますが、筆者の意見には同意できない部分も多くあります。僕は戦争をやめる方法はないと思います。しかしやめたいとい

う強い思いはあります。僕が思いつく一つの方法は『生きる』ということの検証です。一人一人が少しでも多く『生きる』いや『生かされている』ことを自覚して生活していくべきです。もし地球上の全員が生かされていることを自覚できれば譲り合いの心が増えて平和になる。二つ目の方法。宇宙開発の促進とか新しいマーケットの開発は一時的に戦争を防げると思います。現代の戦争はお金を稼ぐためにあるといわれているので、もっと別の分野で稼げるようにすればそちらに行くのではないかと。(後略)」

そして西谷氏の授業を受けて次のように記している。

『なんかやらなあかん』それが一つ強く思ったことでした。自分は今まで『戦争あかん』という正しくて当たり前のイメージを持っていました。でも今の世界であの国がどうで、どうしたから悪いとか、今日はあそこで何人死んだとかを知ることはありませんでした。話を聴いて『世界のアメリカ』に失望しました。全世界の人間 70 億人が立場とか国とかどういうことを抜きにして現実を見れば誰だって誰が悪いかわかるはずです。わからないとおかしい。どう考えてもアメリカはやり過ぎている。そしてそれを止められない政府。おかしい、おかしいと思います。いくら先進国で金を持っていたって、間違っただけをしたら意味がない。ほんまに日本にがっかりした。それと同時に 1 人の力の小ささを感じました。西谷さんがあんなに頑張ってるのに、現に僕達には届いてなかった。それをキャッチできなかった。そんな僕達にも問題があるのではないかと感じました。僕は世界平和の前に関係ない人、戦いを望まない人が死なない世界を本当に創りたい。問題は平和じゃない。今死にそうな人、今困っている人をまず助ける、それが大事だ。そして世界中の反戦人、現状がおかしいと思っている人を集めて、その人達が一つの勢力となって助けるのがいい。決してアメリカ全員がおかしいわけではない。中には反戦を掲げる人もいるはずだ。そういう人を探して伝えて繋がっていききたい。本当に話を聴けて良かった。戦争を止めるには前述のような人をみんなで集めて 1 つの組織となって、会員 10 億人とかになって、政府とは別に丸腰で戦争に介入していいといい。自分がやってもいいと思った。国が国を止めるんじゃなくて、人が国を止める。それは『攻撃と共存』とは大きく異なった『弱者が数で強者を制す』、それが 17 才の結論です」

パネルディスカッションの司会を経ての感想が次の通りである。

「なくす方法はある。小さいときから教育現場でもっと大事なことを教える。『生きる』、『命と金』といったテーマを小さい時から与える。大きくなってから気付いても時既に遅し。そのシステムに組み込まれている。そうなる前に人として大切なことをしっかりと気づき考えられる教育を小中高大とすべきだ。これは机上の空論であるが、自分が大きくなったら周りの子供に伝えたい。そして戦争で困っている人達をまず助けたい」

Z はその後この授業とは別に設けていた「興味関心ある職業人に自分でアポイントを取って、一人称の聞き書きをまとめる」インタビュー課題として、西谷氏を選びインタビュー作品としてまとめた。更に 2 年後の 3 年生人権学習で西谷氏がゲスト講師として来校した際には、学年全体のパネルディスカッションの司会役を務め、全体を取り仕切るにまでになったのである。

4. 効果

生徒の感想作品をもとに、臨床こくご学としての平和教育は「学んだことを頭の中（観念の世界）

で自己完結」するだけにとどまらず、「社会への考えを深め」「社会が抱える問題に主体的にかかわる思想の礎をつくる」「『立体的な』知になる」ことにつながっていくことを示す。ここでは表1⑥での授業の感想も引用しながら論じる。

aの感想「授業中、ただの教材として読んでいた性悪説が、今はすごく胸を痛める。でも今日感じたこの気持ち、ずっと覚えていたい。何ができるのかな、何ができるのかな。助けたいという気持ちを実際に行動を起こすことはすごく勇気がいるけれど、自分にもそんな勇気があればいいなと思う」は「学んだことを頭の中（観念の世界）で自己完結」するだけにとどまっていない例であるといえる。ただ性悪説という新しい知識でしかなかったものが、西谷氏の戦場の映像や話と結びついて、頭の中では収まりきれなくなっているのである。自身のジレンマがそれを示している。単なる新しい知識の吸収であれば、ここまでではないだろう。

「社会への考えを深め」ている例としてはb「イラク戦争には性善説も性悪説も全く意味をなさないと思います。私の班は『スポーツ』というキーワードを出して先生にも笑われたけど、かなり良い案だと考えます。他の案『思いやり』とか『認め合う』とかは理想です。それができないから今戦争が続いているんです。…アメリカ人が撃ったウラン弾のせいで障害を持った子は本当にアメリカに『思いやり』を持つことができるのでしょうか。家族や恋人が殺されているのに『認め』ることができるのでしょうか」やd「法治国家は性悪説に基づいているように思えるが、私はそうではないと思う。法律があるのは守るべき最低限のルールや国を動かすために必要だからではないか。…」の感想が挙げられる。これらは性悪説を単なる知識にとどめずに、現実社会との関わりの中で、この思想を考えている。とりわけイラク社会の平和には性悪説も性善説も意味をなさないとして、平和構築の方法として「スポーツ」を提案しているが、西谷氏はイラクではサッカーが人気であることを説明し、この政策を評価された。またgの感想「私は西谷さんの話を聴きながら『私たちにできることは何か』を考えていた。日本にいる私たち高校生でもできることには限りがある。その中で最も大切なこと、それは『知る・理解する』ことだ。これは『誰もができる国際協力』としてよく言われることだが、やはりこうしないことには何も始まらないのではないか。（中略）今回の西谷さんの話はいろいろなことを考えさせられた。こうした機会を通じて『知り・理解する』ことも国際協力の一環である」も「社会が抱える問題に主体的にかかわる」ことに繋がるといえよう。知識としてとどめるのではなく、自分にできることは何か、行動の段階に思いを馳せているからである。

小説の授業での、生徒からの質問と西谷氏のやりとりは「学びの内容を立体的に捉え直し、リアリティを持つ」ことにつながっているといえる。西谷氏存在は小説を読む際に、生徒が戦争のリアリティにたどり着くための想像力を助ける働きとなっているのである。

①について述べると、手榴弾を手榴弾として読む場合と、手榴弾の特性を知った上で読む場合ではおのずから違いが出て来る。手榴弾の特性を知った上で読むと、この手榴弾は作者がトレーニング通り、タイミング通りに投げて殺したことがよりイメージできる。③④ではリラックスしている根拠は文脈から読み取れても、論拠までは考えにくい、戦場での人間の様子を教示してもらうことで、その根拠の正当性が円滑に理解できるといえる。⑤⑦についても文章上意味はわかっても、兵士としてどのような訓練を受けているのか（つまり考えなくてもよくなることを）知ること、納得いくであろう。⑫については、文章からでも作者は心の整理がつかないことが読み取れるが、アメリカ兵のその後の説明を受けることで、この作者が心の整理をつけることの困難が予想され、本文冒頭箇所の、なぜ戦争のことを書き続けるかという作者の思いに対していっそう共感して読めるのではなかろうか。

ただ文章を読んで理解するよりも、引っかかる箇所について戦争の実態の説明を受けながら読むことで、イメージが膨らみやすく、よりリアリティに即した読解が可能であると考えられる。「1. はじめに」で述べたように、「一般的な国語科教育では、戦争の持つ「人間の生死に関わる極限状況への想像力なくして、『過去の戦争』や『遠くの戦争』と今の自分たちとの『乖離』を埋めることはできない」（竹内，2011,p.149）が、西谷氏が介在することで、生徒は単に文章だけを読むよりも想像しやすくなっていると考えられる。したがって西谷氏は、生徒が想像力を働かせやすくなる「補助輪」の役割を果たしているといえよう。

「社会が抱える問題に主体的にかかわる思想の礎をつくる」ことについていえば、Zの事例はまさしく該当するであろう。Zは評論を読んだあとに「僕は戦争をやめる方法はないと思います。しかしやめたいという強い思いはあります。僕が思いつく一つの方法は『生きる』ということの検証です」とし、その後二つの方法を述べているが、三つの方法ともどこか他人事で「自分」が関わることなく、現実離れしている。頭の中でだけ考えているようである。

しかし西谷氏と出会って、いきなりこう書き出している。

「なんかやらなあかん」

そして西谷氏の話を受けて『世界のアメリカ』に失望しました。全世界の人間 70 億人が立場とか国とかどういうことを抜きにして現実を見れば誰だって誰が悪いかわかるはずです。わからないとおかしい。どう考えてもアメリカはやり過ぎている。そしてそれを止められない政府。おかしい、おかしいと思います。いくら先進国で金を持っても、間違ったことをしてたら意味がない。ほんまに日本にがっかりした」と自分なりに国際情勢を憂え、諦めに似た怒りを抱いている。その感情は「それをキャッチできなかった。そんな僕達にも問題があるのではないかと感じ」た自分たちにも矛先が向けられている。自分の問題として感情が入ってきているのが前の感想との違いであろう。そして「僕は世界平和の前に関係ない人、戦いを望まない人が死なない世界を本当に創りたい」という叫びにつながり「自分がやってもいいと思った」の言葉に表れているように、戦争を防ぐ方法がより当事者性のある現実的な方策になってきている。そして 17 才の結論が『攻撃と共存』とは大きく異なった『弱者が数で強者を制す』とあるように、評論の内容をふまえて自分なりのことばの主張になっている。

そして西谷氏を招いてのパネルディスカッションを経て「小さいときから教育現場でもっと大事なことを教える。『生きる』、『命と金』といったテーマを小さい時から与える。大きくなってから気付いても時既に遅し。そのシステムに組み込まれている。そうなる前に人として大切なことをしっかりと気づき考えられる教育を小中高大とすべきだ。これは机上の空論であるが、自分が大きくなったら周りの子供に伝えたい」と、教育という地に足のついた解決策を自分なりに導き出し「戦争で困っている人達をまず助けたい」と結んでいる。

この感想の変遷を見れば、Zは心の中に「社会が抱える問題に主体的にかかわる礎」を造ったといえるのではなかろうか。おそらく単に評論を教室で読んだだけではここまで考えを昇華することはできなかったであろう。教材を土台にして「戦場の専門家」である西谷氏と出会うことで、自分の考えの至らなさを見つけ、自分の考えを昇華し、行動する姿勢に変えていこうとする変容ぶりが見てとれる。

また臨床こくご学における平和教育の可能性として、西谷氏との協同授業の内容が生徒の人生に繋がっていくことがある。たとえば次の表 1 ⑥の授業時の感想（ア・イ）はそのことを示している。

ア 昼休み西谷さんとお話して日本の薬はとても重宝すると聞けてとても嬉しかったし、私にも新しい道が 1 つ見えた気がしました。今まで自分のために薬を学んでいこうと思っていたけど、こうやっ

て今自分が戦争などで苦しむ人たちに何ができるか考えた時に、少しでも役立つ方法があることが知れてよかったです。

イ 講演があった日に、お昼をご一緒させていただいた時、先生から将来の夢を問われて特に決まっていなと私は答えていたのですが、今後の進路としては農学か薬学を考えています。私は食べるのが好きなので、農学に進んだら食料の質と向上について研究出来たらよいと思っています。また薬学に進んだら（中略）とにかく人の役に立てるような仕事がしたいと思っていました。しかし今まで考えていたのは実は「日本国民のために役立てる仕事がしたい」としか考えていなかったことに、講演を聴いてから初めて気づきました。農学に進んでも薬学に進んでも自分は何らかの形で戦争に巻き込まれた民間人の方々の役に立てるかもしれない、と意識することができました。

2人の女子生徒はそれぞれ薬学や看護に進学していったので、西谷さんの授業で考えたことを心に留めながら今も学んでいるのかもしれない²⁾。臨床こくご学における平和教育は「なんかやらなあかん」というZのことに象徴されるように、教科書の内容読解だけにとどまる教育よりも、その後の行動に繋がっていく可能性が大きいと考えられる。

5. おわりに

最後に従来の国語科教育と比較しながら、臨床こくご学における平和教育の可能性や課題について述べる。従来の国語科教育と臨床こくご学での平和教育の違いは次の3点にまとめられる。第一は従来の国語科教育は戦争文学の読みだけに留まるのに対して³⁾、臨床こくご学では戦争の経験者や体験者がゲストとして登場し、読むだけでなく見る、聞くという学習行為が積極的に加わるという点である。教材として「生身の人間」が生徒の前に現れることが大きく異なるといえる。

第二は従来の国語科教育の場合、戦争というリアリティを文学という虚構を通じて伝えられている作者のメッセージを読み取るにあたって、自身の持つ想像力だけでリアリティに迫らなければならない。しかし臨床こくご学では戦争を知るゲストが登場することで、生徒が戦争というリアリティに近づくための想像力を駆使する際に個人では限界のあるところを補う役割を果たす。これによって生徒はより教材の内容に近づくことができ、しかも表面的な理解だけでなく、現実の世界に即して文章を読み取ることができるようになるといえる。

第三は従来の国語科教育の場合、方法の原則は「多くの人たちが『文学作品を文学作品として読ませる』と言ってきた」(大槻,2005,p.303)。したがって「文学作品を何かを教えるための素材として扱ったり、文学作品によってなんらかの徳目を教えようとしたりするの、少なくとも国語・文学の授業ではない」(大槻,2005,p.303)とされてきた。しかし臨床こくご学の場合は、ゲストを招くことで従来の目的だけに留まらず、思想の礎や行動の芽を養うことを目論む。「問題意識が啓発された生徒には大きな効果をもたらします。自分たちの考えの不足点や自分たちの解決案の妥当性などを確かめることができ、考えを行動に変える力が伴っていくのです」(和田,2016,p.17)といった英語でのアクティブ・ラーニングの実践の成果があるのと同様に臨床こくご学においても、現実との関わりの中でその文学のテーマを俎上に載せて考えたり、行動に移していく可能性があるといえよう。

これらの違いを踏まえて、臨床こくご学として今後平和教育に取り組む場合、戦争経験者や紛争地での活動体験者への聞き書きも実践の可能性として有効であると思われる。教員側がゲストを招くの

ではなく、生徒が探して交渉して出向く形である。年々戦前生まれで直接の体験者が減少している中で、探し出すのは困難になりつつあり、探し出しても年齢的にインタビューに応じられない可能性も考えられる。対象を広く戦地での活動体験者として実践していくのが（戦後の戦争も含めることになるので）現実的であろう⁴⁾。

課題としてはいかに批判的な視点を持ってゲストの話や映像を見て、聴くことができるかが挙げられる。「映像には、平和教育において重要な『想像力』を助ける力がある」（高部,2011,p.169）一方「力があると同時に危険もはらんでいる」（高部,2011,p.169）とされる。つまり、映像は制作者が見た現実を切り取って再現している以上、制作者の主観や意図から逃れることができないのである。このことは映像だけではなく「語り」も同じことがいえる。したがって、臨床こくご学のような形で平和教育を実施する場合はゲストの語りや映像から「何が語られ、何が語られていないか、何が映り、何が映っていないか」といった批判的視点を持つことが生徒側にも授業実践者にも求められるであろう。



写真① 2007 年本校での初の授業時の様子



写真②噂を聞いて「モグリ」が多くやってきた



写真③昼休み本校和室で西谷氏を囲んで



写真④笑顔で質問に答える西谷氏

注

- 1) 2013 年の授業で「自爆テロの若者が突然乱入してきた。君ならどうやって説得するか」と生徒らに問われた。西谷氏は「自分なら、まあ座ってお茶か食べ物でもつまめ、と言って勧める」と述

べられたのが印象的であった。

- 2) 2名とも附属中学校出身者である。全般的にこのような授業で、感性に富み優れた感想を書くのは附属の出身者が多いように感じる。村上(2013)の指摘にあるように、各附属学校で行っている国際交流活動がここにも生かされているのかもしれない。
- 3) 全国私学こくご教科懇談会は全国の私学の国語科教員の実践研究を活発に行っている。2013年には『私学の国語教育「平和教育」の授業づくり』という冊子を出版した。その中に「全私研平和教育実践報告目録(暫定)」として1987年から2013年にかけての主な実践がまとめられているが、今回のようなゲストとともに文学作品を読み合う実践は見当たらない。
- 4) 戦前生まれで長年私学教員として国語科教員として平和教育を実践した森本真幸氏は「私は、国語教育の実践で戦争体験の聞き書きをさせていました。けれども、そういう戦争体験を語ってくれる対象者がいなくなってきました。そうすると、そういう聞き書きができなくなり、戦争の記憶がどんどん失われていきます」(全国私学こくご教科懇談会,2013.p.2)と語っている。2013年高校1年生「現代文」で興味ある職業人・社会人への聞き書き実践に取り組んだ際、本来身内は対象者として不可としていたが、「戦争体験者に聴く」場合のみ可とした。すると10数名が戦争体験者に話を聴いて課題を提出した。

参考文献

- 「朝日新聞(大阪本社)朝刊」2007年1月10日 ひと欄「イラク報道で平和・協同ジャーナリスト 基金大賞を受けた 西谷文和さん」
- 今橋映子(2008)『フォト・リテラシー』中央公論新社
- 大槻和夫(2005)『大槻和夫著作集 第九巻 平和教育への宿願』溪水社
- 「私学のこくご教育」・編集委員会(2013)『私学の国語教育「平和教育」の授業づくり』全国私学こくご教科懇談会
- 高部優子(2011)「コラム8 平和教育における映像の役割」竹内久顕編著『平和教育を問い直す 次世代への批判的継承』法律文化社, p.169.
- 竹内久顕(2011)「第11章 国語教育と平和教育」竹内久顕編著『平和教育を問い直す 次世代への批判的継承』法律文化社, pp.146-151.
- 西谷文和(2008)『西谷文和の「戦争あかん」シリーズ2 戦場からの告発—アメリカがイラクにこだわる5つの理由』せせらぎ出版
- 西谷文和(2011)『戦火の子どもたちに学んだこと アフガン, イラクから福島までの取材ノート』かもがわ出版
- 札埜和男(2014)「臨床こくご学の実践と理論—ゲスト講師との協同授業—」『京都教育大学教育実践紀要』第14号 pp.11-20.
- 村上登司史(2013)「附属学校がめざす児童生徒の国際理解—京都教育大学附属高等学校2年生に対する2012年調査を分析資料として」『京都教育大学教育実践紀要』第13号 pp.203-212.
- 和田玲「続生徒の“心”に火をつける!『アクティブ・リーディング』の実践」(2016)『英語の先生応援マガジン 2016 秋号』アルク, PP.16-17.

謝辞

毎年のように多忙な合間を縫ってお越し下さった西谷文和氏に心より感謝申し上げます。おかげさまで生徒の中にはお話を契機に進む道を決めた者もありました。